

学校からの逃走

大 城 亘 武

要 旨

本研究の目的は、中学生の学校適応について、学校要因を中心に検討することである。沖縄県内の3つの中学校の生徒男女1093人から得られたデータを分析した。

カテゴリカル回帰分析を施した結果、次の点が明らかになった。

- a. いじめがあることは、学校適応の抑制要因である。
- b. 校則が厳しいことは、学校適応の抑制要因である。
- c. 相談しやすい先生がいることは、学校適応の促進要因である。

はじめに

文部科学省は、平成19年度の長期欠席者の児童生徒数について、「対前年度比16.4パーセント増の合計19万9千人」と広報している。さらに「不登校」を理由とする児童生徒数は「中学校」10万5千人（対前年度比2.2%増）」と広報している（ホームページ①参照）。

古市・玉木（1994）は、中学生における学校生活の楽しさとその規定要因について調査研究し、学校の楽しさの規定要因を、級友適応、教師適応、学業適応、家族適応の側面から検討している。

高旗・北神・平井（1996）は、登校している生徒の「向授業性（『授業回避の感情』を含む）中学生の「向学校性」について調査研究し、「授業肯定因子」「集中性因子」「授業回避因子」を抽出した。各因子について女子のスコアが高かった。また、学年間比較では、学年上昇に伴い事態は悪化するようであった。部活参加者が非参加者より授業肯定的であり、授業回避に否定的であった。「問題は、不登校ではない。学校や授業への否定的な態度を持つ者の割合の多さである。もっと多くの生徒たちが、授業や学校に対して希望や喜びや積極性を持つことができるように学校を改善することは、社会全体の課題であるといえよう。」と主張している。

本研究の目的は、中学生の学校適応について、学校要因を中心に検討することである。

方 法

- (1) 調査対象：沖縄県3中学校生男女である。1093件の調査票が回収された。内訳分けを表1に掲げる。

表1 調査協力者内訳

学年	1年	2年	3生	合計
男子	169	229	186	584
女子	158	173	173	504
不明	2	1	2	5
合計	329	403	361	1093

- (2) 調査項目：中学生の日常生活意識を捉えるために34設問から構成されるアンケート用紙を用いた。学校適応については「学校をやめたいと思う」頻度（1. しばしば、2. 時々、3. ない）を用いた。学校要因は、表2に掲げる15項目（ある、ない）である。
- (3) 調査の実施：2007年5月から7月。
- (4) データ処理：PASW Statistics 18を使用し、カテゴリカル回帰分析を行った。

結 果

1 概要

学年・性を一括した場合の「学校をやめたいと思う」に対するカテゴリカル回帰分析の結果は表2に掲げた通りである。 $R=.431$ $R^2=.186$ $p=.000$ となった。各説明項目の係数および有意水準は表2に掲げた通りである。係数値の符号が正の場合は「学校をやめたいと思う」と正の関連があり、負であれば逆の関係にあることを意味する。

- ⑧「校則がきびしい」、⑮「いじめがある」の2項目がプラスの有意な関係となっている。学校からの逃走に有意に抑制的働くのは③「遅刻欠席がない」、⑭「相談しやすい先生がいる」、⑤「授業さばらない」、

表2 「学校をやめたい」に対する説明変数の標準回帰係数 (β) および有意水準 (p) (全体)

項目	N=1072	
	ベータ (β)	有意確率 (p)
①部活動に参加	-.071	.004
②先生と個人的にも話す	-.002	.957
③遅刻・欠席なし	-.146	.000
④下校時に寄り道しない	-.091	.000
⑤授業さぼらない	-.098	.003
⑥先生とふざけることがある	.024	.433
⑦クラスで発言力がある方である	.043	.163
⑧校則きびしい	.189	.000
⑨部活盛ん	.016	.619
⑩設備そろっている	-.005	.850
⑪雰囲気明るい	-.036	.230
⑫世間の評判よい	-.049	.061
⑬尊敬できる先生いる	-.040	.149
⑭相談しやすい先生いる	-.119	.000
⑮いじめがある	.142	.000

表3 「学校をやめたい」に対する説明変数の標準回帰係数 (β) および有意水準 (p) (男子)

項目	N=568	
	ベータ (β)	有意確率 (p)
①部活動に参加	-.034	.561
②先生と個人的にも話す	-.026	.674
③遅刻・欠席なし	-.089	.030
④下校時に寄り道しない	-.063	.084
⑤授業さぼらない	-.119	.006
⑥先生とふざけることがある	.047	.267
⑦クラスで発言力がある方である	.059	.197
⑧校則きびしい	.207	.000
⑨部活盛ん	-.032	.507
⑩設備そろっている	-.007	.849
⑪雰囲気明るい	-.082	.049
⑫世間の評判よい	-.042	.212
⑬尊敬できる先生いる	-.005	.905
⑭相談しやすい先生いる	-.116	.001
⑮いじめがある	.142	.003

④「下校時寄り道しない」、①「部活動に参加」である。⑫「世間の評判が良い」は、有意な傾向を示している (p<.06)。

ベータが有意にならなかった項目のうち、⑥「先生とふざけることがある」、②「先生と個人的にも話す」、⑬「尊敬できる先生がいる」の3項目はいずれも教員要因である。

表4 「学校をやめたい」に対する説明変数の標準回帰係数 (β) および有意水準 (p) (女子)

項目	N=499	
	ベータ (β)	有意確率 (p)
①部活動に参加	-.059	.180
②先生と個人的にも話す	.010	.952
③遅刻・欠席なし	-.213	.000
④下校時に寄り道しない	-.110	.000
⑤授業さぼらない	-.107	.034
⑥先生とふざけることがある	.005	.905
⑦クラスで発言力がある方である	.017	.856
⑧校則きびしい	.149	.000
⑨部活盛ん	.034	.452
⑩設備そろっている	-.010	.817
⑪雰囲気明るい	-.006	.898
⑫世間の評判よい	-.024	.551
⑬尊敬できる先生いる	-.064	.107
⑭相談しやすい先生いる	-.153	.000
⑮いじめがある	.167	.000

表5 「学校をやめたい」に対する説明変数の標準回帰係数 (β) および有意水準 (p) (1年生)

項目	N=323	
	ベータ (β)	有意確率 (p)
①部活動に参加	-.050	.441
②先生と個人的にも話す	-.072	.256
③遅刻・欠席なし	-.027	.869
④下校時に寄り道しない	-.144	.002
⑤授業さぼらない	-.123	.118
⑥先生とふざけることがある	.122	.105
⑦クラスで発言力がある方である	.083	.298
⑧校則きびしい	.111	.035
⑨部活盛ん	-.005	.934
⑩設備そろっている	-.021	.673
⑪雰囲気明るい	-.134	.012
⑫世間の評判よい	.052	.308
⑬尊敬できる先生いる	-.041	.458
⑭相談しやすい先生いる	-.121	.016
⑮いじめがある	.185	.017

2 男女別の分析

データを男女別に分析する。

2.1 男子の場合

カテゴリカル回帰分析を施したところ、 $R=.433$ 、 $R^2=.187$ 、 $p=.000$ となった。

標準回帰係数 (β) を表3に掲げた。係数が有意になったのは15項目中6項目である。学校からの逃走

表6 「学校をやめたい」に対する説明変数の標準回帰係数（ β ）および有意水準（ p ）
（2年生）

項目	N=400	
	ベータ (β)	有意確 率 (p)
①部活動に参加	-.078	.127
②先生と個人的にも話す	.015	.942
③遅刻・欠席なし	-.132	.004
④下校時に寄り道しない	-.091	.020
⑤授業さぼらない	-.041	.627
⑥先生とふざけることがある	.013	.817
⑦クラスで発言力がある方である	.025	.765
⑧校則きびしい	.198	.000
⑨部活盛ん	-.036	.517
⑩設備そろっている	-.002	.963
⑪雰囲気明るい	-.059	.282
⑫世間の評判よい	-.075	.107
⑬尊敬できる先生いる	-.054	.288
⑭相談しやすい先生いる	-.062	.246
⑮いじめがある	.136	.007

を促進するのは ⑧「校則が厳しい」と ⑮「いじめがある」である。学校からの逃走に抑制的に働くのは、⑤「授業をさぼらない」、⑭「相談しやすい先生がいる」、③「遅刻・欠席なし」、⑪「雰囲気明るい」である。

2.2 女子の場合

カテゴリカル回帰分析を施したところ、 $R=.464$ 、 $R^2=.215$ 、 $p=.000$ となった。

標準回帰係数（ β ）を表4に掲げた。係数が有意になったのは15項目中6項目である。学校からの逃走を促進するのは ⑮「いじめがある」と ⑧「校則が厳しい」である。学校からの逃走に抑制的に働くのは、③「遅刻・欠席なし」、⑭「相談しやすい先生がいる」、④「下校時に寄り道しない」、⑤「授業をさぼらない」である。

3. 学年別の分析

3.1 1年生の場合

カテゴリカル回帰分析を施したところ、 $R=.452$ 、 $R^2=.204$ 、 $p=.000$ となった。

標準回帰係数（ β ）を表5に掲げた。係数が有意になったのは15項目中5項目である。学校からの逃走を促進

表7 「学校をやめたい」に対する説明変数の標準回帰係数（ β ）および有意水準（ p ）
（3年生）

項目	N=349	
	ベータ (β)	有意確率 (p)
①部活動に参加	-.103	.028
②先生と個人的にも話す	.009	.844
③遅刻・欠席なし	-.237	.000
④下校時に寄り道しない	-.044	.451
⑤授業さぼらない	-.141	.027
⑥先生とふざけることがある	.001	1.000
⑦クラスで発言力がある方である	.036	.656
⑧校則きびしい	.194	.000
⑨部活盛ん	.045	.350
⑩設備そろっている	.008	.897
⑪雰囲気明るい	.066	.208
⑫世間の評判よい	-.097	.029
⑬尊敬できる先生いる	-.023	.631
⑭相談しやすい先生いる	-.183	.000
⑮いじめがある	.139	.013

するのは ⑮「いじめがある」と ⑧「校則が厳しい」である。学校からの逃走に抑制的に働くのは、④「下校時に寄り道しない」、⑪「雰囲気明るい」、⑭「相談しやすい先生がいる」である。

3.2 2年生の場合

カテゴリカル回帰分析を施したところ、 $R=.421$ 、 $R^2=.177$ 、 $p=.000$ となった。

標準回帰係数（ β ）を表6に掲げた。係数が有意になったのは15項目中4項目である。学校からの逃走を促進するのは、⑧「校則が厳しい」と⑮「いじめがある」である。学校からの逃走に抑制的に働くのは、③「遅刻・欠席なし」、④「下校時に寄り道しない」である。

3.3 3年生の場合

カテゴリカル回帰分析を施したところ、 $R=.502$ 、 $R^2=.252$ 、 $p=.000$ となった。

標準回帰係数（ β ）を表7に掲げた。係数が有意になったのは15項目中6項目である。学校からの逃走を促進するのは、⑧「校則が厳しい」と ⑮「いじめがある」である。学校からの逃走に抑制的に働くのは ③「遅刻・欠席なし」、⑭「相談しやすい先生がいる」、⑤「授業をさぼらない」、①「部活動に参加」、⑫「世間の評判がよい」である。

表8 カテゴリカル回帰分析において項目毎の有意となった標準回帰係数 (β)

項目	全体	男子	女子	1年生	2年生	3年生
①部活動に参加	-0.071					-0.103
②先生と個人的にも話す						
③遅刻・欠席なし	-0.146	-0.089	-0.213		-0.132	-0.237
④下校時に寄り道しない	-0.091		-0.110	-0.144	-0.091	
⑤授業さばらない	-0.098	-0.119	-0.107			-0.141
⑥先生とふざけることがある						
⑦クラスで発言力がある方である						
⑧校則きびしい	0.189	0.207	0.149	0.111	0.198	0.194
⑨部活盛ん						
⑩設備そろっている						
⑪雰囲気明るい		-0.082		-0.134		
⑫世間の評判よい						-0.097
⑬尊敬できる先生いる						
⑭相談しやすい先生いる	-0.119	-0.116	-0.153	-0.121		-0.183
⑮いじめがある	0.142	0.142	0.167	0.185	0.136	0.139

表9 いじめがある と 学校やめたい のクロス表

			学校やめたい			合計
			しばしばある	時々ある	ない	
いじめがある	あてはまる	度数	41	64	97	202
		期待度数	22.8	58.4	120.8	202.0
		やめたいの%	33.9%	20.6%	15.1%	18.8%
		調整済み残差	4.5	1.0	-3.8	
	あてはまらない	度数	80	246	544	870
		期待度数	98.2	251.6	520.2	870.0
		やめたいの%	66.1%	79.4%	84.9%	81.2%
		調整済み残差	-4.5	-1.0	3.8	
合計	度数	121	310	641	1072	
	期待度数	121.0	310.0	641.0	1072.0	
	学校やめたいの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表10 校則きびしい と 学校やめたい のクロス表

			学校やめたい			合計
			しばしばある	時々ある	ない	
校則きびしい	あてはまる	度数	95	165	250	510
		期待度数	57.6	147.5	305.0	510.0
		学校やめたいの%	78.5%	53.2%	39.0%	47.6%
		調整済み残差	7.2	2.4	-6.9	
	あてはまらない	度数	26	145	391	562
		期待度数	63.4	162.5	336.0	562.0
		学校やめたいの%	21.5%	46.8%	61.0%	52.4%
		調整済み残差	-7.2	-2.4	6.9	
合計	度数	121	310	641	1072	
	期待度数	121.0	310.0	641.0	1072.0	
	学校やめたいの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

表11 相談しやすい先生いる と 学校やめたい のクロス表

		学校やめたい			合計	
		しばしばある	時々ある	ない		
相談しやすい先生 いる	あてはまる	度数	12	78	209	299
		期待度数	33.7	86.5	178.8	299.0
		学校やめたいの%	9.9%	25.2%	32.6%	27.9%
		調整済み残差	-4.7	-1.3	4.2	
あてはまらない		度数	109	232	432	773
		期待度数	87.3	223.5	462.2	773.0
		学校やめたいの%	90.1%	74.8%	67.4%	72.1%
		調整済み残差	4.7	1.3	-4.2	
合計		度数	121	310	641	1072
		期待度数	121.0	310.0	641.0	1072.0
		学校やめたいの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表12 遅刻・欠席なし と 学校やめたい のクロス表

		学校やめたい			合計	
		しばしばある	時々ある	ない		
遅刻・欠席なし ある		度数	64	237	531	832
		期待度数	93.9	240.6	497.5	832.0
		学校やめたいの%	52.9%	76.5%	82.8%	77.6%
		調整済み残差	-6.9	-6	5.0	
ない		度数	57	73	110	240
		期待度数	27.1	69.4	143.5	240.0
		学校やめたいの%	47.1%	23.5%	17.2%	22.4%
		調整済み残差	6.9	6	-5.0	
合計		度数	121	310	641	1072
		期待度数	121.0	310.0	641.0	1072.0
		学校やめたいの%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

考 察

全体および性別、学年別で有意となった係数を表8に掲げた。「学校をやめたい」の説明要因として際立っているのは、促進要因としての「いじめがある」と「校則がきびしい」の2項目である。どの分析単位においても有意となっている。「学校をやめたい」と密接に関連する。

「いじめがある」学校は苦痛である。本調査ではどのような「いじめ」であるか詳らかにしない。すなわち、いじめられているのか、いじているのか、傍観者なのか、明らかではない。しかし、「いじめ」の存在が認知されていることは重要である。いじめのある場所（学校）を回避したくなるのは自然であろう。

表9は、「いじめがある」と「学校をやめたい」のクロス分析の結果を示している。

「いじめがある」と認知しているのは18.8%である。

それらのうち、「学校をやめたい」と思う頻度の比率は「ない」「時々ある」「しばしばある」の順に高まって行く。調整済み残差はいずれも有意(1.96より大、または-1.96より小)となっている。「いじめがある」と認知していない場合は、この関係は逆になっている。

つぎに、「校則きびしい」と「学校をやめたい」の関係を見る(表10参照)。「学校をやめたい」の反応比率は有意である($\chi^2=69.294$, $df=2$, $p=.000$)。「きびしい」とい認知している場合、「学校をやめたい」思う比率は「ない」「時々ある」「しばしばある」の順に高まって行き、調整済み残差は有意である。「校則きびしい」と認知していない場合は、逆の関係が認められる。

「校則」の禁止事項に息苦しさを感じている様が推測できる。「校則」の定める規定の内容分析をしないことには明言できないが、約半数の中学生が「校則き

びしい」としていることに留意する必要がある。

つぎに学校適応に関連の強い項目について検討する。全体的に、また男女別、学年別の各分析単位においても有意となった項目は1つもない。

「相談しやすい先生がいる」項目の標準回帰係数 β は、中学2年生を除いて有意となっている。「学校からの逃走」を抑制する要因として注目される。「相談しやすい先生いる」と「学校やめたい」の反応比率の違いは有意である ($\chi^2=27.667$, $df=2$, $p=.000$)。

表11によると「相談しやすい先生がいる」とした者の「学校やめたい」と思う比率は、「ない」「ときどきある」「しばしばある」の順に減少している。調整済み残差は「しばしばある」と「ない」で有意となっている。「相談しやすい先生」の存在が学校適応の重要な要因であることが示唆される。ここで注目されるのは、「尊敬できる先生」や冗談のいいあえる先生、すなわち「先生とふざけることがある」や「先生とは個人的にも話す」といった要因が全く利いていないことである。先生と仲がよいことが必ずしも学校適応につながらないことに留意しなければならない、ということであろう。

また「遅刻・欠席なし」が中学1年生を除いて「学校をやめたい」と思うことと密接な関係を有している。「遅刻・欠席なし」が「あてはまる」場合、「学校をやめたい」頻度は「ない」「時々ある」「しばしばある」の順に高くなっている。「あてはまらない」場合は逆の順になっている。

「尊敬できる先生」と「相談しやすい先生」のクラーのVは.426 ($p=.000$) となり、有意な関連を示している。「相談しやすい先生」の背景に「尊敬できる先生」が想定されているかもしれない。

おわりに

厳しい校則は学校適応にマイナスに働く。同じように、「いじめがある」のも学校適応を危うくする。一方、本人自身の「遅刻・欠席」がないことが学校適応の指標となっている。さらに、「相談しやすい先生が

いる」こと、本人が「部活に参加していること」がよい学校適応と関係していることが明らかとなった。「尊敬できる先生がいる」ことが学校適応に利いていないことが注目される。

いじめの把握、校則の現状についての見直し、気軽に生徒の相談に乗る教員の生徒支援が有効な学校適応の為の方略となりうることが示唆される。

附記

- 1) 本研究の実施にあたり、沖縄県内3つの中学校の校長、教諭の皆さんにご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。
- 2) 調査に協力頂きました生徒の皆さんに感謝いたします。
- 3) 本研究の一部は、日本教育心理学会第53回大会(於北海道)で口頭発表した。

参考・引用文献

- 浅川潔司・東 由佳・古川雅文 2001 「青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究」『兵庫教育大学研究紀要』第1分冊 pp.99-103.
- 古市裕一 1991 「小・中学生の学校ざらい感情とその規定要因」『カウンセリング研究』Vol. 24, No.2, pp.23-27.
- 古市裕一・玉木弘之 1994 「学校生活の楽しさとその規定要因」『岡山大学教育学部研究収録』第96号, pp.105-113.
- 佐藤寿仁・菅原正和 2007 「中学生における学校不適応と信頼感に関する研究」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第6号, pp.207-216.
- 杉本希映、庄司一子 2006 「中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究」『学校心理学研究』第6巻第1号, pp.31-39.
- 高旗正人・北神正行・平井安久 1996 「中学生の「向学校性」に関する研究」『岡山大学教育学部研究収録』第102号, pp.249-258.

ホームページ

①平成20年度学校基本調査速報 注差結果の要旨 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/002.htm

Escape from School

Yoshitake Oshiro

Abstract

This paper examines how various social factors influence junior high school students' abilities to adapt to the institutional demands of their schools. Recent data collected from 1,097 junior high school students in Okinawa Prefecture are presented and analyzed.

Categorical regression analysis supports the following observations: (a) bullying constrains students' abilities to adapt fully to school life; (b) the existence of strict rules and regulations significantly constrains students from adapting to school life; and (c) the existence of a sympathetic teacher promotes students' abilities to adapt to school life.